

沓掛良彦・高田康成訳

『エラスムス・トマス・モア往復書簡』

岩波文庫、二〇一五年

伊藤達也



本書は一四九九年一〇月二八日から一五三三年六月(日付未詳)まで、ロツテルダム出身の人文主義者エラスムス(一四六六年「諸説あり」―一五三六年)と、ヘンリー八世の離婚に反対しロンドン塔に幽閉後に斬首された英国の大法官トマス・モア(一四七八年―一五三五年)が交わした五十通のラテン語書簡の日本語訳である。原典から翻訳された文章は隅々までクリアである。充実した訳注、各書簡前に解題と巻末に詳しい解説、関連略年表と索引が付属する。全四四二頁。

往復書簡はエラスムスがイギリスでトマス・モアと邂逅し、イタリヤ帰りの所謂アユルダー朝人文主義者の導きでギリシア語を発見した年から始まる。この出会いがエラスムスのその後の人生を決定づけた。書簡一(エラスムス)は「エジプトの荷物担ぎ人夫の背骨をへし折ってしまうほどの大量の手紙をいただきたいです」と友人への手紙の催促から始まる。年齢や国籍や立場を超えた友情の誕生。書簡二はモア邸で書かれた『痴愚神札賛』の序となつた有名な文章である。激動の三十四年間を内側から垣間見させる生々しい資料。書簡三十三(エラスムス)「新約聖書の仕事は進行中です。[…:]」私の健康状態が二か月も良好であったならば、私がいなくともこの仕事が完了するところまで持つて行けたのですが。書簡四十五(エラスムス)「いまや私は、安全に暮らすには、どこかの王侯のもとか、富裕な都市に身を寄せるしかないのです。そういうわけで、私はあちこちから招かれています。しかし

宮仕えの身となるよりは、むしろ死んだほうがましだとするのが私の性格なのです。最後の書簡五十(モア)は、自らの悲劇的な死を予告するかのようだ。「小生は一計を案じまして、生前に自分の墓を建てる手配をしたのです。あるがままの真実を墓碑銘に刻み込み、公の証にしよようと決めたのです。往復書簡は、モア自ら同封した墓碑銘の引用で終わる。「願わくば、せめてこの墓のなかで、三人が一緒になれるよう。生が許さなかつたところを、死が与えてくれるように天に祈る」。

この『往復書簡』は、二〇一四年に出版された沓掛良彦著『エラスムス人文主義の王者』(岩波現代全書)、および同著者の『痴愚神札賛』ラテン語原典訳(中公文庫)と併読されるべきである。またモア側からは澤田昭雄によるラテン語原典訳『ユートピア』(中公文庫)さらに中世末期の知的大転換を描いた高田康成著『キケロ ヨーロッパの知的伝統』(岩波新書)にまで併読は広がるだろう。これらの仕事の目的は翻訳を通じて北方ルネサンスの精神世界を現代日本に紹介することである。

エラスムスの中世のあらゆる權威の源であつたラテン語訳聖書をギリシア語訳との対照によつて相対化した。彼は常に移動しながら筆の力だけで、宗教的な非寛容、暴力に対抗する叡智、寛容、非暴力の重要性、さらに人間を学問の対象とする人文主義を広めた。これがヨーロッパを変えたのである。しかしこの大変革はヨーロッパをヨーロッパたらしめている中世、その末期に現れたルネサンスの精神とそれを支えたラテン語とともに失われてしまう。十七世紀以降、各国家は中央集権化と植民地獲得合戦を推し進める。狂信の排除はプロテスタント化を進めた人たちの耳には届かない。宗教戦争の始まり。再び不寛容な世界がやってくる。宗教改革の一つであつた英国国教会の誕生とトマス・モアの処刑は密接に関係している。その報に接してのエラスムスの狼狽を証言する書簡は前掲の『エラスムス 人文主義の王者』で紹介されている。そしてエラスムスはモアの死の翌年、後を追うようにしてこの世を去る。

この本は一部の国家の帝国化、暴力や不寛容が復活している現代社会で読まれるべき言葉として我々に届けられている。